

# ダンス、してまますか？

前野隆司

(慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授)

協力……黒沢美香、横山千晶、武藤浩史



## 前野隆司——プロフィール

1962年、山口県生まれ。キヤノンの技術者として実績を上げたのち、アカデミズムの世界に転身したという、異色のキャリアを持つ研究者。その活動は多様で、触覚についてユニークな研究を行い、また工学の知見から人間の脳モデル「受動意識仮説」を発表。現在は文理融合領域、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授としてヒューマンマシンインタフェースのほか、ロボットから、心の哲学、倫理学、教育学、組織・地域活性化、幸福学まで、あらゆるシス

テムのデザインとマネジメントに興味を持つ。

『脳はなぜ「心」を作ったのか―「私」の謎を解く受動意識  
仮説』(2004年、筑摩書房)、『錯覚する脳―「おいしい」も  
「痛い」も幻想だった』(2007年、筑摩書房)、『脳の中の  
「私」はなぜ見つからないのか?―ロボティクス研究者が見た  
脳と心の思想史』(2007年、技術評論社)、『記憶―脳は「忘  
れる」ほど幸福になれる!』(2009年、ビジネス社)、『思考  
の整理術―問題解決のための忘却メソッド』(2009年、朝日新  
聞出版)、『思考脳力のつくり方―仕事と人生を革新する四つ  
の思考法』(2010年、角川ワンテーマ21)など、活発に著作も発  
表している。

前野隆司 <http://takashimaeno.com/>

# 1. 真っ白な舞台で思ったこと

舞台の上に立つ僕。

舞台を照らすいくつもの白いスポットライトがまぶしい。

観客の拍手が聞こえる。

観客の息づかいを感じる。

しかし、舞台を取り巻く暗闇の中に何十人もいるはずの観客の姿は、なんとなく輪郭しか見えない。

無限の空間の中に舞台だけが明るく浮かび上がっているようだ。周りには人がいるのに、なぜかその存在が希薄に感じられ

る。いるのにいないかのような、非現実的な世界。

これまで感じたことのない、夢のような、ふわふわした世界。

ああ、舞台の上に立つ人の風景って、こんななんだ、と思った。静かに、わくわくした。

人は、普通、人に見られると思うから、緊張する。しかし、このときの僕は妙に落ち着いていた。初めての舞台が、あまりに非日常的な経験だったからか。冷静に、自分の身体と対話していた。心の中は静かだった。真っ白な、無音の空間にいるようだった。

ああ、お茶と似ている。僕は思った。

きれいに手入れされた庭から、小さな窓のような入り口を通って茶室に入ると、そこは無駄を排した非日常空間だ。茶事の席で、懐石料理のお椀のふたについた水滴の風流を眺めたり、茶碗の模様のわびさびを感じる自分。風で木々の枝々が摩擦する音だけが微かに聞こえる、静かな空間。小さな美を敏感に感じ取るとき、そこに静かな至福がある。微かな違いを見分けられる繊細な美意識を自分が持っていたことに、喜びを感じる。ああ、日本人でよかった、と。



茶室には、もうひとつ、至福がある。それは、茶室を出たとき。簡素で薄暗い茶室から外に出ると、外の木々の緑が普段よりも遥かにあでやかで瑞々しく感じられる。世界の美しさを感じる感受性が研ぎすまされたことに、静かで強い喜びを感じる瞬間。

なるほど、黒沢美香さんの目指すミニマルダンスというのは、茶の湯のような、あるいは禅寺の庭のような、無常の美なのかもしれない。そんな気がした。でも、これを美香さんに話したら、「そーんなことない」とけたけた笑うのかな、とも思った。

妙に冷静にそんなことを考えながら、踊りだす僕。ミカヅキ  
会議というダンスユニットのメンバーである僕は、静かに踊り  
はじめた。真っ白な世界の中で。練習のとき以上に静かな、  
真っ白な心で。

想像してみて頂きたい。真っ白なライトに照らされた空間の  
中で、「綿貫さん」という題名の即興ダンスを踊る三人。女性  
一人と、男性二人が、舞う。

想像できるだろうか。いや、たぶん、読者の皆さんはそう簡

単には想像でできないだろう。なにしろ、どんなダンスなのか、説明をしていないのだから。それが、文章という媒体の限界であり、奥深さでもある。文章では、ダンスのクオリア（感覚の質感）を、とうてい伝えきれるものではない。しかし、だからこそ、そこから、感じる自由が生まれる。ミニマルから生まれる、無限の自由！

僕たちは、舞った。最初はゆっくりと、時に激しく。三人の呼吸が、合ったり、合わなかったり。とにかく、人に見せるためではなく、ダンスすること自体を目的にして、舞う。

舞台の上で演技をしていながら、人に見せるということ意識せず、自分と仲間との新しい対話の結果を堪能できたことが、僕には驚きだった。しかし、決して「表現」などせず、美や表現という本来ダンスの目的と考えられがちな価値の超越を目指すことこそが黒沢美香さんの目指す所だとしたら、僕たちの初舞台は大成功だったということなのだろう。

黒沢美香さんは、僕のダンスの先生。僕にとっては、姉のような存在だ。なぜ姉みたいかというと、僕のことを、「理屈っぽい弟ができたみたいでうれしいわ」と言っただけでかわいがってくれるから。

美香さんは、コンテンポラリーダンスのゴッドマザーともいわれる。子供の頃は天才ダンサーといわれ、バレエを踊っていたそうだが、いつの日か、ミニマルダンスに引かれたという。彼女の姿勢は一貫していたが、世間が彼女のダンスにつけた名前前は、時代とともに、モダンダンス、ポストモダンダンス、コンテンポラリーダンスと変遷した。

彼女は天才ダンサーだと思う。といっても、実はダンスの腕前のことは僕にはさっぱりわからない。僕がすごいと思うのは、その言語表現だ。というか、言葉ににじみでる、生き方。

「うまいかどうかなんて、ぜんぜん、大事ではない」

「見せようとしては、ダメ」

「考えては、ダメ」

「技術はダンスの邪魔になる」

「大事なのは、ダンスがあるかどうか。それだけ」

「体が充実するポイントを探すことが大事」

「自然に、無意識から、動きが出てくるのを待つ」

ダンスがあるとは何か。意識して見せようとする動きではなく、自然に、無意識に、思いもよらない体の動きを創造できたとき、それを、ダンスがあるという。技術は関係ない。観客も

関係ない。主観的な体験なのだから。

僕等は、商業的な美しさにも魅力を感じる。コーラスラインが、一糸乱れぬチームワークで、全体の調和を見せてくれるとき、そこに、美を感じる。それはそれでいいではないか、とも思う。しかし、コーラスラインのダンサーたちが、自分たちの個性を押し殺して、みんなと合わせることには専念したあげくに、捨て去ったものがあつたとしたら、そこに表現の本質があるのではないか。

僕は絵を描くが、素人がうまいかへたかで絵を判断するとき

に閉口する。絵のいい悪いは、うまいかへたかではない。うま  
く言えないが、いいか、悪いかだ。創造的か、そうでないかだ  
と言うべきかもしれない。創造者の個性が出ているか、出てい  
ないかかもしれない。いずれにせよ、技術は単に前提であつ  
て、それ以上のものではない。

美香さんのすごいのは、「技術は前提」ということさえも取  
り去る境地を試みていることだ。つまり、ダンスがいいかどうか  
かは、うまいかへたかではないという。普通は、基本的なスキ  
ルは既に身につけているという前提の上で、創造的かとか、個  
性が出ているかとかいうことを問題にするのが、いいか悪いか



の判断だろう。もちろん、絵の場合と同じく、うまいかへたかで判断する素人は少なくないのだろうが、そのレベルはまあ置いておこう。黒沢美香さんのすごいのは、うまいかへたかという前提さえも取り去った上で、いいダンスとは何かという境地を明らかにしようとしていることだ。すごい。

要するに、言ってしまったえば、僕の参加しているダンスユニット「ミカヅキ会議」は、技術的にはお話にもならない中年素人集団だ。僕なんか、ダンサーになろうと思ったこともないし、なりたいと思っただこともないので、基本ができていないどころか、運動不足で体はかたいし物覚えは悪いし、おおよそダンス

には向いていない。そういう人を集めて、「そこにはダンスがある」と言うのだから、美香さんの感性は、常識的に見ると、特別な部類かもしれない。

いくつか、思い当たることがある。勝手に同類とみなすべきではないんだらうけれども、ある意味で似たことがいろいろなところで起こっているように思う。

日本の商業芸術は、今後どうなってしまうんだらう、といわれる。いや、今後ではない。すでにかなり危機的状况ともいわれる。ダンスも、音楽も、文学も。いいものよりも売れるもの

がもてはやされる。多くの人は、残念ながら、いいものを見る目がない。いいものを見ていないから。だから、供給者が提供した安易なものをつかまされる。そして、文化が低俗化し続ける。悪循環。

政治のポピュリズムともよく似ている。政治はイデオロギーを見失い、大衆迎合に走る。政治家の理念は失われ、投票者の気に入る行動に走る。

教育の低俗化も似ている。大学に入ってくる学生の学力が低いからと、大学生に高校数学の補習をしたり、就職試験を受け

る力がないからと、就職面接の練習をさせたり。教育者の仕事  
が低俗化している。

素人でも本を出せる世界、というのも構造が似ている。紙の  
本はコストがかかったので厳選された者しか本を出せなかつ  
た。しかし、電子書籍化が進むと、出版コストは大幅に下が  
る。よって、本を出したい素人が、気楽に本を出せる時代がも  
うすぐやってくるだろう。ここでも、玄人と素人の境界はあい  
まいになる。

もしかしたら、あらゆる分野で、この動きが増殖中なのでは

ないか。世界中の大衆がインターネットでつながり、洗練された玄人の世界と、ぽつと出の素人の世界の境界があいまいになる。いや、もはや混ざり合っている。世界から骨のある玄人を捜すのが、どんどん、どんどん、困難になる。

美香さんが、プロとして大衆への迎合を拒絶し、ミニマルなダンス表現を追求したあげくに、僕たちのような素人の体の動きの中にダンスを発見したというのは、矛盾のようで、矛盾でないようで、面白い。

プロとは何か、何か、と突き詰めていった結果、見つけた究

極は、素人だった。ということか。

十牛図じゅうぎゅうずみたいだ。十牛図とは、禅宗の修行を、牛飼いに例えたものだ。牛と牛飼いの関係を表した十枚の絵から成るから十牛図という。

十枚全部の説明はここではしませんが、要するに、やつと牛を飼いならすすべを理解したと思ったら、牛飼いは再び降り出しにもどって町に帰る。町のにぎわいも欲もある豊かな世界に、何事もなかったかのように帰ってゆく。まるで愚者のような、よれよれの服を着た出で立ちで、町をさすらう。心の赴くまま

に従えども矩を踰のりこえず、とは孔子の七十歳のときの境地だが、それにも似ている。

要するに世の中は繰り返した、という教訓と、悟りの境地は実は無垢な子供の心と似ている、という教訓につながっている。

東洋的世界観は繰り返しの世界観で、西洋的世界観は進歩的世界観だ、といわれる。インドも中国も日本もまとめて東洋と  
いうのはおおざっぱすぎるとか、西洋にだって繰り返しはある  
とか、反論はいろいろと予測されないでもないが、大雑把にい

えば当たっていると思う。

西洋の一神教の世界観では、人は最後に天国か地獄に行く。東洋にも極楽はあるものの、ヒンドゥー教や仏教には輪廻思想がある。繰り返した。輪廻から抜け出せるのは、むしろ進歩というよりも無垢な子供にもどったかのような悟りの境地に至ったときなので、進歩史観というよりも循環史観だといえるだろう。

東洋流では、科学技術の進歩だって、進歩とは見なさない。科学技術が精緻になっただけで、人間の社会は別に大して変



わっていないし、むしろ地球の環境を破壊し尽くしたりしている様は退化のようだ。結局、昔も今も、人間は自然から生まれ生きて、最後にまた自然に帰っていく、という生業を繰り返しているにすぎない。

近頃の若者は情熱がない、という。しかし、情熱って、何だろう。西洋の進歩型の考え方に従って、人間は進歩した方がいいよ、という価値観が僕たち日本人に刷り込まれた結果か、高度成長やバブルという一見ものすごい進歩に見えた幻想を体験したからか、中高年は情熱的に進歩を目指すべきだと感じる。成就できなかつた物悲しさとともに。

しかし、バブル後に生まれた若者は、進歩の時代を知らないから、進歩の原動力であるところの情熱というもののイメージがつかめないのだとすると、それは当然の帰結というべきものなのではないだろうか。

ミニマルダンスも、ニヒリズムも、近頃の若者の生き方と似たようなものと言えるのではないだろうか。

僕は、コンテンポラリーダンスを踊りながら、一瞬のうちにそんなことを考えていた。いや、もつとうつすらと、考えたか考えないかわからないくらいの希薄さで考えたのだが、あとで

思い出して文章にしてみるとこうなつたというのが正確なところだ。ああ、これがダンスの醍醐味だ。

## 2. 渚の風

僕は、ミカヅキ会議のダンスのために、「渚の風」という曲を作詞作曲した。もちろん、この曲に合わせて踊るのだ。

「渚の風」 (♪クリツクすると曲が聴けます)

わなげなさなげなとうりつきー

いしかりたいからたりつきー

わなげなさなげなとうりつきー

いしかりたいからたりつきー

ゆがなはーいひがならーい

ゆがな love me はかならーい

なせそではせそませそだ night

はせそでませそやんばん night

ダンスから、「技術」や「見せるという思い」や「意識的なポーズ」を最大限排除したものがミニマルダンスだとしたら、詩から意味を排除したらミニマル詩になるのではないか。そう思って作った。ほんの小一時間で、詞と曲ができた。なんとなく、日本語のような、英語のような、アジアのどこかの言語のような。

海の音が聞こえてきそうな気がしたから「渚の風」とつけたら、美香さんもメンバーの二人も、渚の風はないよ、とほめて(？)くれた。うさくんさいようでうさんくさくさいようでいい、とも言われた。どこがうさんくさいのかよくわからないの

だが。

皆さんは、日本語の音の響きの中で、何が好きだろうか。

僕は、「わ」「な」「さ」。

いまあらためて詩を鑑賞してみると、「わなげなさなげな」という出だしには、僕の好きな響きが存分に入っている。

勝手に精読してみると、「わ」は和。日本のことでもあり、平和で仲良く、という意味でもある。優しい言葉だ。

しかし、まてよ。日本はもともと「倭」だったのではないか？ のちに、「和」をあてるようになったのではないか。

「倭」は「委<sup>ゆだねる</sup>」に人が加わった字形なのだそう。音符の委は、「なよやかな女性」を意味し、解字は「ゆだねしたがう」「柔順なさま」「つつしむさま」、また「うねって遠いさま」を表すという。ただし、倭という国名の由来は不明なのだそうだ。

こうしてみると、「倭」は女性的な国日本の本質を表しているようで面白い。この話はA i R 2で書いたなあ。いや、A i

R1だったか。

### 3・ダンスと非ダンスの「引き裂かれ」とは何か？

さて、この文章の意図には既にお気づきだろうか。

美香さんのダンスと同じように、何かを意図した文章ではなく、無意識からわき出て来るものをただそのまま文にするという制作過程により文を作ることを意図したものだ。

しかし、「何も意図しない文章を作る」という「意図」を超越できないのが、ジレンマだ。「渚の風」も同じだ。意味のな



い言葉を並べる、という明確な意図のもとに作られている。あ、だめだ。この文章は、ダンスしていない！

そういう意味では、この文章も、「渚の風」も、美香さんのダンスとは似て非なるものなかもしれない。美香さんのダンスは、意味を排除する、という「意図」も超越しているように思えるからだ。明確な指針などない。計画はされているが、行き当たりばったりだ。そう見えるのに、ダンスしている！

そうか、どのようにしよう、という「意図」があることが、まだこの文章を本物にしていけないのだ。なにしろ、AiR3に

載せることを「意図」しながらこの文章を書いている。だめだ。だめだ。

ミカヅキ会議のメンバーの武藤浩史さんの「前野さんの、論理で考えようとするのがまたはじまった」という声が聞こえてきそうだ。

もつと、論理を超えたい。新しいものを作りたい。

いや、その思いが、だめだ。新しいものを作りたいたんて、思うな。何も、考えるな。何も考えずに文章を書いてみる。

……。

何も考えないと、文章が書けない……。

いいことを思いついた。コレクティブ・インテリジェンスだ。集合知。美香さんと、ミカヅキ会議の二人にメールしてみよう。

この文章は、これからどう書き進めていけばいいですか？

## 前野さま

\*

\*

\*

原稿読みました。すごいなあ。前野さん、真っ白な頭で踊っていた割には本当にしつかりいろいと把握している：：という  
か後から考えて把握しているつもりなのか。前野さんの中の小  
さなこびとさんがたくさん動いている感じがよくわかりました  
よ。

私的には前野さんの文章の最初を読んでとにかく思い出  
したのは、「悲しみ」ですね。

何しろ最初の五分でぶちっといってその後はこの痛みとこの動かない脚とどう折り合いをつけていくのかばっかり考えておりました。最初何が起こったのかわかった時は「やっぱりこうなる運命だったんだ」って思いました。絶対に物事はうまくいかないものなんだ。今日ぐらいこんな思いにさせなくてもいいのに、でも結局こうなんだ。とくに私の場合は絶対にそうなんだ。ダンサーが激しく踊っているときに自分だけはしんとして、その気持ちこそが前野さんのいう「茶室」でしたね。一瞬深く深く深く悲しかったなあ。悲しみは静かだからいつでも好きです。そのあとですぐに上に書いたみたいなのがわさわさと頭の中にめぐってくるわけです。私の場合よくあるのはどこ

かで私のことを見ている誰かがいて、その人に向かって怒っているという感じですね。でもその人が何もしてくれるわけでもないし、いつもこうだからすぐにあきらめました。あきらめは早いほうです。

その次はくるくると忙しかったですね。Show must go on! ですわ。まず脚をくりくりと動かしてみても痛みを試してみませんでした。ちよつと動くとなんとなく裂ける感が強まるし、ダンサーズに絡みたいけれど、ちよかちよかとしか動けない。そこでやっていたのはとにかく上半身で踊ること、これのみ。顔は思いつきり楽しみました。それでも結構踊りになるものです。最初はそれで乗り切ったが問題はミカヅキだ。

着替えてミカヅキ会議が出て行く前に武藤さんには「踊れな  
いかも」とささやきました。武藤さんは「前野さんとどうにか  
するから」って言ってくれたが、あの場では何のことを私が  
言っているのかよくわかっていなかったと思います。とにかく  
学生ダンサーが舞台に出て行ったそのあともしてはて…と頭の  
中だけで考えていました。まず武藤さんが出て、前野さんが舞  
台に出て、一瞬ためらう。さて、出られるか出られないか…。  
大きくとにかく踏み出してみよう。ここで崩れたらそこでやめ  
よう。

一歩踏み出した時に歩けたのでそのままいつちやっただとい  
うかんじです。

あの時ほど脳と体の分離を感じたことはないね。もう痛いという感覚がないのですよ。いや。たぶん痛いんだらうけれど、意識の上に上がらない。アドレナリンのせいかもしれないんですがこれってなんなんですかね。結局体は論理的ではないんですね。そしてとにかくミカヅキ会議は楽しかった……。

不思議なものであの時の痛みは感覚としてはわかるけれど、あまり大したものではありません。しかしいまだにおぼえているのは足を切る直前、踏み出した時に観客席にいた一人の人と目が合ったことです。どんな人だったかはわかりませんが、とにかく目と目があったこと。あ……と思った瞬間ぶちっといきま



した。そのあと立て続けに来た何も考えないあのしんとしたかなしみだけはいまだにありありと思いだせます。私にとってはあれもまた踊りだったのでした。「肉離れと茶室」

なあんてまるでレスになっ  
ていませんが、こっちも何も考  
え  
ず  
に  
書  
い  
て  
み  
ま  
し  
た  
。

\*

\*

\*

横山

## 横山千晶様

さっそくのご返信ありがとうございます。いやいや、「綿貫さん」の瞬間にあんなに色々なことを考えられませんか。たぶん。考えたことを書こうと思ったら、説明したがる自分がどんどん書き加えていったというのが実際のところですよ。

真っ白な光の中で感じていたのは「悲しみ」でしたか。それはそうですよね。

僕は踊っているときには横山さんが肉離れを起こしていたなんて確か知らなかったもので、いや、武藤さんから聞いたのだった

たかな。少なくとも全く痛そうではなくて、武藤さんも横山さんも、その前から舞台に出ていたもので、ウォーミングアップができていましたよね。だから、うわあ、二人とも元気に踊っているなあ、自然に踊りが出てくるに任せる中で、なかなかこの二人の元気さには追いつけないなあ、と思っていたのを思い出しました。

そういえば、舞台に出る前に、近くに座っておられた首くくり栲象さんから、「足踏みをするとか、体を動かしておいてから舞台に出た方がいい」と言われたのですが、今頃になってその意味がしみじみわかりますね。

しかし、肉離れを起こしていたのに、どうしてあんなに満面

の笑顔で踊れるんですか。「顔は思いっきり楽しみました」って、あの笑顔は自然に出現したのですか。

それより、出られるか出られないか、一步踏み出してみたら歩けたのでそのままいったところは、まさにダンスしてますね。すばらしい。

痛いという感覚がなかったという超越感も、すごい。さすが、リーダー。

痛みといえは、僕はいつの間にか、最近、四十肩が治りました。痛くなる時にはわかるのに、痛くなくなるときには気づかない。人間は不可逆ですね。

前野隆司

\*

\*

\*

ミカヅキ皆さま

前野さんの行動力に昨夜びっくりしていたのですが、今日は横山さんもお返事があり、体験したことをこんな積極的にすいすい書いてしまうことに頭が下がります。書く筋肉です。

綿貫さん⇩ワタヌキさん…三人の踊りの運びに漢字の影があ

りませんでカタカナの方が似合いそうです。

今、私は神戸の新長田という街にいます。今日少し歩いたらロボットの店(?)がありました。定休日か、時々開店するだけなのか解りませんが今日は閉まっていたのでガラス戸越しに撮りました。ガラス戸越しに店の中を覗くとロボットやロケツトやタイムマシンのようなものがぎゅーぎゅー詰めに店内にありました。本気ですね。

私は明日明後日と本番があり三十分のソロをやります。白い光も悲しみも、呪い(最近の自分の感想)もエネルギーにして、武

藤さんのように肝心な時に気が狂いたいです。自分に溜めて膨らまし最中で、前野さんの原稿をまだ今夜も読みきれていないのですが写真だけお送りします。

\*

\*

\*

黒沢美香









## 黒沢美香様

ご返事ありがとうございます。

綿貫さんではなく、ワタヌキさんなんですね……。

ロボットの写真もありがとうございます。実際に見てみたい  
です。レトロですね。

文章の方は、全く急ぎませんので、お時間のあるときにでも  
ざっと見ていただければ幸いです。

前野隆司

\*

\*

\*

前野さん。そうだ。前野さんはワタヌキさんの前に客席にいたんだものね。観客となっているのに実はパフォーマーというその位置づけもドキドキします。

美香さんのロボットすごし！

パフォーマンズを見たいですね。

顔で笑って……というと思いだすのが大阪の「くいだおれ太

郎」くんです。これも究極のロボットか。

かんがえてみたらくだおれ太郎君と自分は似ているなあと思います。困ったときの顔もいきがっているときの顔も私は太郎君の気持ちがよくわかります（つてなんのこっちゃ）。

ミカヅキは皆でくだおれ太郎の格好で踊りたいなあと思いました。

ところで「くだおれ」が閉店した後、太郎君はどうしているのでしょうか。

美香さん、神戸のパフォーマンスに行けなくて残念。でも昨日初めてMBTをはきました。今日は横浜から横浜美術館まで

歩いてみます。まだすいすいというわけにはいかないけれど、慣れてくるかな。

横山千晶

\*

\*

\*

踊りだす前といえ、坂倉杏介さんも、僕が踊り始める前に近くの席にいました。

先日、坂倉さんに会ったとき、「前野さんがそばに座っていると、すーっと出て行って踊り始めたのを見て、いい

なー、僕も踊りたいなー、と思った」とおっしやっついていました。このコメントもダンスしてますね。

僕の部屋に、いま、研究用の女性アンドロイドロボットがいます。名はまだない。奈良女子大の学生が作ってくれたもので、おしとやかに静かにしか笑わないんですよ。くだいだおれ太郎君の笑い方とは違うかも。

\*

\*

\*

前野隆司





## 皆様

前野さんのアンドロイドを見ていて、「笑い」でひとこと。  
昨日横浜美術館に松井冬子展を見に行きました。これ、マス  
トです。

美香さんの「呪い」につながるものがある（かもしれない）。  
美香さん、ウェイブで思い切り波乗りしてください。

横山

\*

\*

\*

皆さま

そうなんです、今回は「Wave」という27年も前の踊りをやっています。「Wave」について書いたものがあります。

[http://www.db-dancebox.org/04\\_sc/1202\\_kacdfo2\\_e/index.html](http://www.db-dancebox.org/04_sc/1202_kacdfo2_e/index.html)

もし、前野さんのAiR3の材料になるようなことがあるか、お時間ある時に覗いてみていただけたらうれしいです。

黒沢美香

黒沢美香 「Wave」

ダンス…黒沢美香

1985年、これから新たにダンスをやっていく上で「Wave」を私の宣言にしよう。その意味でこれがデビュー作と言えます。前に出て後ろに下がってを、何回も繰り返す、そういう踊りです。この「Wave」の動線が縦の反復で、当時も一つの試みが円の動線で、円周を数人でぐるぐる廻る（「ORB」初演1986年@スパイラルホール）ものでした。こういう偏つた反復は美術、音楽ではミニマルアート、ミニマルミュージック

クが1960年代から盛んで、当然ダンスにもすぐにミニマルはやってきました。80年代にミニマルはすでに珍しいことではないにしても、日本ではそういうものを「ダンス」として扱わず、なんだか分からないものは警戒して「パフォーマンス」と束ねて呼ばれていました。私はミニマルの偏った率直さ潔さに出会うと心身が覚醒するのです。もう何十年も前のことです。もしなにか自慢できるとしたら、まだ私がミニマル信者ということですよ。ミニマルアートが時代的なものや流行ではなく、運命や性格のようにそこから離れられないのです。エピソードを付け加えさせていただけると、ラジオ体操第二の上半身だけそのままやって、下半身は別に超絶技巧ステップを組み

合わせた「6:30am」を、「Wave」と同時期に発表しました。

「Wave」は飲み難い。それで、誰からもダンスに見える口当たり爽快なラジオ体操の方を目くらまし の盾にする戦略でした。「6:30am」は人気であちこちから呼んでいただき、持ちネタのようにこればかり踊る羽目になると、自分が芸人にならないよう気をつけました。こわいもので30年近く経ってもラジオ体操の「あの踊り」、と今でもまだ言われます。本命の「Wave」と極端に異なる周りの反応でしたが、ミニマルは自分がやらなくて誰がやるという正義と、やり甲斐に邁進しました。「あれはダンスではない」と言われれば言われるほど益々ミニマルに傾倒してゆくのですが、自分で作ってしまった目く

らまし「6:30am」と戦わなくてはならない理由もあつたのです。「Wave」も「6:30am」は二つの別のもののように当時は思っていました。今はその隔たりが自分の中で縮まっています。好きな女の子をいじめてしまうように、ぎとぎとした過剰さにミニマルがまみれて台無しになるとたのしくて仕方ありません。年月が経ち、私のミニマルの表し方に変化はありますが、常にミニマルが基本で測量していることに変わりなく、ミニマルアートの緊張によって私は活性し鍛えられたと自覚しています。当時怖々と初めて形にしてみたものが「Wave」です。（2011年12月記・黒沢美香）

プロフィール 【黒沢美香】 横浜出身。5歳から舞踊家の両親（黒沢輝夫、下田栄子）のもとでモダンダンスを習う。1982（85年NY滞在。当時のNYダウントウン・ダンスシーンをリードする振付家の作品を踊り、国内外の公演に参加する傍ら、ジャドソン・グループの痕跡を追いかける。85年「黒沢美香&ダンサーズ」活動開始。99年遅蒔きのソロデビュー『薔薇の人』シリーズ開始舞踊コンクールで1位を5度受賞の他、新人賞、優秀賞、舞踊批評家協会賞、日本ダンスフォーラム賞受賞。54才。

\*

\*

\*

武藤様

三月中に一度、例のA i R 3のために、インタビューさせてもらえませんか？

三十分から一時間くらいで結構です。宜しくお願いいたします。

前野隆司

\*

\*

\*



## 前野さん

この件、反応が悪く申し訳ありません。

一度、お会いしましょうか。今日、読み直して、どうしてこれになかなか返事できなかつたかも少し分かりました。そのことも含めて、話しましょう。

\*

\*

\*

武藤浩史

二〇一二年三月十六日 武藤浩史氏インタビュー

**前野** お忙しい中、ありがとうございます。まずは、どうしてもなかなか返事ができなかつたのか、理由から教えてくださいますよ。

**武藤** 理由ね。やつぱりこう。「十秒の間」

自分はこれはやらない、というか。自分に禁じていることつてありますよね。

**前野** それをやっている？

**武藤** そう。まあ、前からわかっていたんだけど。

僕が倫理として禁じていることは何かというかね、たとえば、日本人でよかった、というようなことは言わない。

**前野** はあ。

**武藤** それからね、東洋と西洋。東西論というのは言わない。それから、終末論的な考え方、つまり、ある種の、次代が墮落しつつある、みたいなことは言わない。

それをやってしまうと、思考停止になってしまう。なんとなくくまとまってみんなが納得してしまう。

それを禁じ手にしないと、新しいものは出てこない。それから、それを禁じ手にしないと、ある意味で安直な自己肯定になっってしまう。

**前野**　しかし多くの人はそれをやってしまいますよね。

**武藤**　最近の学生が、日本人でよかった、日本の文化はすごい、と言う。ある種の西洋コンプレックスがなくなっただのはいけれども、内向きな感じがする。

僕は、自己肯定はしたくない。自己肯定をしてしまうと、閉じこもってしまう。

**前野** 言語でなくて、自己肯定を体で表現するのはいいんですか？

**武藤** 結果として自己肯定するのはいいと思う。むしろ目指すべきものかもしれない。

最初に日本人でよかったとか東洋がいいと言ってしまうと、そこから何が生まれるんだ、っていうこと。

**前野** 生まれるんじゃないですか？ そう言うことによつて、立場が明確になる。それによつて、今みたいな議論が始まるじゃないですか。

**武藤** でも、それは、ありきたりの立場じゃないですか。

**前野** もちろん、ありきたりです。武藤さんは、日本人でよかったと思うことはないんですか？

**武藤** お茶などの日本文化に触れて、これはいいと思つた時に、日本人でよかったという思考に行く可能性はありますよ

ね。しかし、その道は、そこから面白いものが開いてこない。みんなが歩いてきた道だし、そこから面白い風景が見えてこない。

**前野** 面白くなければいけないんですか？

**武藤** うん。楽しみがないと。

**前野** みんなと同じような平凡なことを言う楽しみだって、あるじゃないですか。多くの人が、いいと思うような。

**武藤** しかし、それは、大学教員としては、だめ。

**前野** え、そんなんですか。文学者としては、だめ、ではなくて？

**武藤** 大学教員として、だめ。

**前野** そうかなあ。

**武藤** 同じことを言っていたら、新しさが無いじゃないですか。新しいことを見つけた喜びがない。



**前野** 大学教授でも、経済学者、工学者、社会学者など、現代社会の墮落を論じたり、東洋と西洋の比較をする人はいるじゃないですか。統計的に見て、東洋と西洋はコミュニケーションの仕方に違いがある、というような帰納的な学問はありますよね。

**武藤** 西洋と東洋という二分法そのものが、乱暴じゃないですか。もとのところが乱暴であれば、意味がないんじゃないか。全く意味がないとは言いませんよ。しかし、少なくとも、二分法を使う際には注意が必要だ。

**前野** おっしやるとおり、学問としてやるときにはきちんと定義をしてから論じますね。たしかに僕も、「日本人は」という言い方は本当は好きじゃないんですよ。学者としてではなく、個人として書くときには、そちらの自分が出て来る。

**武藤** いや。いや。

最後のところに前野さんの新しさみたいなのがあるじゃないですか。意図の話のところ。意図しながら書いているようじゃだめだ、何も意図しない文章を書けるか、というところ。論理を超えた新しいものを作りたい、みたいなの。せっかくあそ

こが面白いのに、僕が禁じ手にしてる表現をして、ぼんぼん地雷の上を歩いていく。

だから、どう答えたらいいかわからなかったみたいなのところがあつて、それで、返信できなかつたんだよね。

しかし、お茶の話と、舞台の話は、面白いじゃないですか。静かにわくわくした、とか。

**前野** それを台無しにしているという感じですか。

**武藤** うん。日本人でよかつたなんて、書かなきゃいいじゃん

(笑)。

次のところ。禅寺の庭のような無常の美とか、日本的なものや東洋的なものに行って説明してしまうところ。そこも、その道があるのはわかるけれども、それはいろんな人が歩いた道なので、そこに考えもなしに踏み込むというのは、禁じるべきだと思うんですよ。

**前野** 僕は、禁じるセンスを持っていないんでしょうかね。

僕も、論文だったら禁じているけれども、エッセーだったら禁じていないということでしょうかね。

**武藤** 対象読者にもよるでしょうけどね。それから、察する

に、幸福の研究をしていると、東洋系の人はこうとか、西洋的な人はこうとかいう研究があるでしょ。

**前野** もちろん、あります。

**武藤** その伝統の上に立っているんじゃないかと思うんですよ。私はその伝統には立っていない。

**前野** システムデザイン・マネジメントという学問は、イデオロギーや立場をあるところに定めて論じる学問なんですよ。

**武藤** なるほど。

**前野** たとえば、日本人でいいか悪いかを、シンプルにモデル化して論じるといふ学問なんです。普通の学問は、人がやっていない新しいことをするのが使命かもしれないが、システムデザイン・マネジメント学は、むしろ、普通の普遍的なことは何かを、システムとして、全体像として、愚直に明らかにしようとする面があります。現代的な学問のアンチテーゼとして。だからかなあ。なんとなくわかってきました。

**武藤** ただ、私が勝手に怒っているだけであって、この文章の

中で一番大切なところは、そういう禁じ手を破ったところではなく、やっぱり、何かが生まれる場所、たとえばダンスでもいいし、前野さんの曲「渚の風」でもいいし。そこで何が起こっているんだろう、という話なんだろうな、と思う。

「な」「さ」「わ」の分析をしているところは面白い。

クリエイションが生まれる場所について書くのは、書きにくいし考えにくい。そんなテーマに取り組むこと自体、面白い。しかも、自分で面白い作品を創作している。もう少しこれを見つめるとどうなるのかという感じがする。

私は、「あの歌は不倫願望の歌だ」と言ったことがありますよね。そういうレベルがある。「な」「わ」「さ」のレベルも

ある。「あ」という音もたらすおおらかさがここにあるのか  
もしれない。できちゃったものの中に、いろんなものが混ざり  
合っている。ところが、これをもつと突き詰めるとどうなんだ  
ろうな、と思っていたら、倭は女性的な国、日本の本質、とい  
う話になってしまう。ここで、また日本の話かよ、となる。日  
本は女性的と言ってしまうのは、ステレオタイプじゃないです  
か。

## 前野

禁じ手も混ざり合っていてもいいんじゃないですか？

## 武藤

ジュースにいろんなものを混ぜてもいいけれども、人工



甘味料を入れては、うまくないだろう、という感じ。

自分でよかった、と思っただけに、それを誰かに言うということとは、真実かどうかということだけではなくて、人に影響が及ぶじゃないですか。これを我々の業界では言説効果といいます。誰かと対話してコミュニケーションしているときに、日本人でよかった、と自己肯定してしまうと、自分とは違う、自分には理解できない他者たちに対して開かれない。閉じてしまう。別に自己否定しなくてもいいんですけど。

たとえば、自信に満ちたアメリカ人。アメリカが一番だと思っている人たちって、閉じている感じがありますよね。そういうことなのかな。

**前野** 今日には重要な話を聞けたなあ。僕は分裂しているんじゃないか。「コミュニケーション」という授業で、自信に満ちたアメリカ人のように振る舞う練習をさせるんですよ。国際人になるために。しかし、もちろん、それに囚われてはだめだと思っっている自分もいる。両面がある。禁じ手を破らない自分と、破る自分と。

**武藤** 強い文化の人間と、周辺の文化である日本は違う。日本は、引き裂かれるでしょ。強い文化に対して同化しなければならぬという圧力と、同化を拒む自分。どっちかに立場が決ま

ればいいけれども、そういうことはありえないから、引き裂かれる。

だから、アメリカで勉強した人間がナシヨナリストになって独立運動をしたりする。引き裂かれの問題。

**前野** 禁じ手にこだわりますが、学者には禁じ手だけど、ふつうのビジネスマンには禁じ手ではないんですか。普通の人が、言いますよね。日本はいいとか東洋がどうのとか。そういう人は禁じ手を破ってもいいんですか。

**武藤** そういう人だって、もつともらしい結論をつけると思考

停止になってしまおう。

**前野** それで安心する人だって、いるじゃないですか。

**武藤** 考えるということは、安心することではないですよね。

**前野** 読者には、考えたい人と、安心したい人がいますよね。

**武藤** もちろん、そのどっちを満足させるかということ。

『日本の品格』のように、安心させることで読者を得ている場合はある。

**前野** 藤原さんも学者じゃないですか。禁じ手を破った学者で  
すか。

**武藤** そんな人、いっぱいいるじゃないですか。

**前野** ああ！ そういうことなんですか。武藤さんは、学者は  
禁じ手を破るべきではないと思うけれども、現実には、禁じ手  
を破る学者はたくさんいるわけなんですね。

僕は禁じ手を破らない方の人だと思っていました？ する側だ  
と思っていたでしょ。

**武藤** する側だとは思っていたけど、地雷ががんがんくるから、もつたいないという気がするんですよ。自分の「渚の風」を載せて、分析を始めているじゃないですか。ところが、日本の話になってしまおうというのはそつちに行きたがる体になっているというか。だから、そつちには行かないでよ、前野さん、と言っているんだ。

**前野** 文章中にも書きましたが、この文章は、構成を考えずに、思いつくままに書いたんですよ。日本人でよかったと思っただのも、分析をしたのも、包み隠さない正直な自分というか。

**武藤** やっぱり、引き裂かれていますんでしようね。もちろん、僕だって、引き裂かれていますよ。みんな引き裂かれています。

引き裂かれていなきゃ、おばかなナシヨナリストみたいになるしかない。いや、ナシヨナリストになるということ自体が、引き裂かれのしるしなのかもしれないし。いろんな人がいるんだろうけれども。

美香さんのダンス論って、とても不思議なところがあるじゃないですか。

十牛図ではないけれども、最高の芸術って、「天才的な素人」が作る面はあると思うんですよ。美香さんは本当の素人を

扱うじゃないですか。そして、我々がやっていることを面白がってくれるじゃないですか。あれって、なんなんだろう。

そういうのが成立する世界と成立しない世界がある。ある種の音楽は楽器が弾けないとだめでしょ。黒沢美香の世界はなぜそれが違うのか。あの人は、普通のレッスンの時には徹底的にバレエの基礎をうるさく言う、という人なんですよ。それはもう、本当に、厳格にやる。そういうものと、我々と遊んでくれるということが同居している。

## 前野

引き裂かかれているんじゃないですか。



**武藤** そう。それがどういふふうにつながっているんだろう、という点が面白い。きつと、過激なつながり方なのかしら、という気がしますよね。

八〇年代に、詩人や音楽家と一緒に仕事をした際に、彼らの体の使い方はすごかった、と美香さんは言っていたでしょ。

**前野** 天才的な素人ですか。

**武藤** 前野さんが曲を作ったじゃないですか。これはどこから出て来るんだろう、と思う。これを聞いたときは仰天したというか。しかし、どこかから出て来ているんですよ。それは、ク

リエーティビティーの問題じゃないですか。おそらく、これまでやってらしたいろんなことがつながつているでしょ。

私が何かを創るときに感覚を言うのと、いつもはふたをしてい  
るものなのに、何かの拍子にあくと、そこからいろいろなもの  
が出て来る。意図とか意思によって、やろうとして出すのでは  
なくて、引っ張ってくるのではなくて、どこかを外してやる、  
というか。ボタンを外すといろんなものが出て来るというか。  
そんな感じじゃないですか。

素人の強みというのがある。おもしろい素人のよさというか。  
リエーティビティーが出て来る。そのおもしろさを追求する  
と、天才的な素人になるんだと思う。

美香さんも、それを追求している部分はある。

話がつながるようで飛ぶようだけれども、ある人が、身体知教育に対していいコメントをくれたんですよ。その時のキーワードが、「自己変容」だったんですよ。

なかなかうまいキーワードを思いつくな、と思いました。

**前野** 成長や学習ではなくて、変容なんですか。

**武藤** 表現というと中央制御的じゃないですか。それに対し、変容というと、受動的に起こっちゃうという感じ。

私が最近気に入っている言葉は、「通り過ぎる」という言葉

なんですすよ。ミカヅキ会議の公演も、「演技する」じゃなくて、「通り過ぎる」というと、自己変容している感じがあるじゃないですか。

**前野** 「自己表現」するんじゃないなくて「自己変容」するんですね。あるいは、「演技」するんじゃないくて、「通り過ぎる」んですね。

**武藤** 人生の感覚ともつながっている。人生は、どう通り過ぎるか。それを楽しむから人生は楽しい。そのことに芸術は関係している。

**前野** ふつうは通り過ぎるとは言わないじゃないですか。逆に、目的意識を持って、自分の夢を実現するように歩んでいこう、と言います。そんな能動的な生き方ではなく、通り過ぎるような受動的なやりかたに面白みを感じているということですか。

**武藤** 自己表現だとか、自己実現だとか、結果を残すということって、ある見方をすればそうかもしれない。自分で何かを本にまとめるとうれしい。でも、それだけじゃない。勝ちます、ではなくて勝っちゃいました、みたいなの。

**前野** 自己実現や自己表現は禁じ手ではないんですか？

勝ちに行こう、とか、自己実現をしよう、とか、自己表現をしよう、というステレオタイプなやりかたが、禁じ手ですよ。ね。

**武藤** いや、勝ちに行こう、とか、自己実現、自己表現は、別に、禁じ手じゃない。

**前野** 日本人でよかった、はだめだけど、勝ちに行こう、はいんですね。ステレオタイプで平凡な価値観であるという意味

では、同じ構造をしているじゃないですか。

**武藤** 勝ちに行こうとすることによって、見えなくなるものってありますからね。

**前野** 日本人でよかった、はナシヨナリズムのようなものとながるからいけないんですか。

**武藤** そうかな。

**前野** 僕は同じに感じるんですけどね。「日本人でよかった」

と「勝ちに行こう」は同じうさんくささを感じつつ、使っている表現です。

**武藤** やっぱりナシヨナリズムは、戦争や差別につながるから意識する。勝ちに行こう、は正々堂々と勝ちに行けばいい。しかし、戦争や差別は正々堂々ではない。

今言われて初めて気づいたんですが、これってけっこうファシズムに近いでしょう。パターンとして。ナシヨナリズムは、現代は墮落しているという見方をする。どこかに墮落し腐敗する勢力があつて、それが純粹な日本人性やドイツ人の伝統をけがしている、そういう論理——いけにえさがし——って、よく



あるじゃないですか。

**前野** 僕の「日本人でよかった」には全くそういう意味はなく、茶の湯を知っていてよかった、くらいの意味なんですよ。ところが、軽々に日本人でよかった、と言うことによつて、ファシズムのようなものが想起されてしまう。だから、禁止手なんですか。

**武藤** そうそう。研究領域の違いで、何に敏感か、は違いますよ。

**前野** なるほど。そういうことですか。

**武藤** 特に大学教員が気をつけなくてはならないのは、その分野が専門領域でなくても、世の中はやはり専門家として見る。その点だと思う。

**前野** なるほど。

**武藤** いやいや。どこから、どこから、生まれてるのかなあ。

**前野** どこからでしょう。

インタビューを終えて。

ああ、地雷を踏んでいたのか、なるほど。

学者経験のない社会人学生に業界のしきたりを指導するときの僕の思いと似ている。あるいは、空気を読めない素人に教育するときと似ている。やんわりとおっしやつているが、要するに、おっしやりたかったことは、

「専門外の者が、知ったかぶりしてプロの世界で適当なこと、

\*

\*

\*

いや、あたりまえのことを、知ったかぶりして言うんじゃないよ」

ということかな。いやいや、そんなネガティブで攻撃的な言い方ではないにしても、

「ある分野の話をするときには、その世界の常識に気をつけて論じないと、あまりにも陳腐で、専門家は受け入れないよ」ということだろうか。

しかし、理工学の専門家がダンスをするときには、まあ、へんなやつと受け入れられるのに、文章を書くと、文学者やその他学者に受け入れられないとしたら、それは不公平だ。どちらもおもしろい素人として受け入れてくれればいいのに。

と、考えたところで思い当たった。

美香さんは、ミカヅキ会議のみんなが、普通の演技っぽく、しやれた感じのというか、わざとらしく、狙ったような体の動かし方をすると、しかる。

「そんな動きはいらない。うまい人がやるような動きを狙っては、だいなし」

せっかく、素人の、素人だからこそその良さを引き出そうとしていたのに、興ざめになる、という。素人がプロの真似をする、と、すぐにボロが出るし、何も面白みがないという。

そういう意味では、ダンスのプロの美香さんと、人文科学のプロの武藤さんの発言は似ている。

素人は思慮なくプロの真似をするな。そんなことより、せっかくの、素人の良さを生かせ。うまくなつたふりなんてして

も、それを素人には見抜けないかもしれないが、わかった人にはお見通しなので、痛々しいから、するな。

もしそうおっしゃっているのだとすると、僕にはそれは保守主義の一種にも見える。

僕自身は、学者と非学者の葛藤とかダンスと非ダンスの葛藤という矛盾を超越するには、徹底的なニヒリズムしかないという視点に立った上で、それらの二項対立を超越した上に立ち現れる自由自在の境地を論理的に人々に伝えることを立ち位置にしているつもりだ。つまり、すべてのことには本質的な価値は

なく、すべての二項対立は本質的に形式に過ぎない。あらゆるものごとには本質的には意味はないし、人間が生きる意味もない。徹底的にない。ナシヨナリズム／イデオロギーの問題や、うまい／へた、見せる／見せないに限らず。だから、そこから見ると、禁じ手を設けること自体が中途半端ないしは部分最適ではないか。しかし、禁じ手を設けないと、徹底的に何も成立しないというのも事実である。しかし、禁じ手って、実は本質的な構造がファシズムやナシヨナリズムと同じであるという自己否定を含有しているのではないか。人類のユウウツである。

なるほど、禁じ手とは、ポストモダン社会において残された



唯一の生き方なのか、とも思う。

どうして、美香さんは、素人がしやれた動きをすることを禁じるのだろう。

どうして、武藤さんは、素人が日本人でよかったと言うことを禁じるのだろう。

もしかしたら、ダンサーや学者を超越し切れていないのではないか。それとも、あらゆる論理は究極的にはファシズム的要素を持つのだが、それをミニマルにとどめることによって何か

が開くことを目指すべきと直感しているのか。そのあがきがダンスなのか。

では、一方の僕は、ダンサーや学者を超越し切れているのか。それとも、心地よく引き裂かれているに過ぎないのか。その引き裂かれこそがダンスなのか。

それは、誰にもわからなせそではせそ。

P. S. 「Wave」と「6:30am」も、引き裂かれているとい  
うことか。

前野さん、武藤さん

\*

\*

\*

インタビュー読みました！

いかにも武藤さんらしくっていかにも前野さんらしい対談に  
思わずむふふ。しかし話がどんどん堅くなってしまうのはやっ  
ぱり二人が研究者だからだろうか。

最後にしつかり前野さんが「反省文」を書いているところ  
が全く泣かせる：（ちなみに反省というのは振り返って省察している、  
という意味での反省です）。いつつもきれいにまとめるのがお好き

な横山としても大いに反省しました（こちらは「いかなな」の反省です）。

そうそう、そういえば藤原正彦が以前ラジオのトークで花火を日本人の精神の真髓だ、とのたまい、引用した句が「おもしろうて、やがて悲しき花火かな」だった。おい、芭蕉が、必死に頑張っている鶉が泣くぞ。その時のインタビュアーが「本当ですなえ」としみじみ言っていたのが、おもしろうて、悲しかった。まあ花火も悲しいけれど。

武藤さんの「通り過ぎる」っていいキーワードですね。私は

自己変容はできない人間だけれど、通り過ぎるって好きです。ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。あ、これって非常に日本人的な考えだな、というとな怒られるかな。これを読んでいて、今日は猛烈に豆腐と納豆とキムチを混ぜたあつたかいおうどんを食べたくなりました。相変わらず脳と胃が渾然一体です。これ、本当においしいので、ぜひとも皆さんもどうぞ。

\*

\*

\*

横山

皆さま

武藤さん横山さんの屈折や疑心やこだわりと努力は理解できません。そして弛まぬ前進の姿に尊敬します。前野さんは疑わないところが私には驚きで、傷のないまますくすく育ったふうなところに私は興奮します。そういう人と初めて友達になったので自分が恥ずかしく思うことがあります。

黒沢

情熱や反対意見や武藤さんの大学教員意識の高さを前野さんは疑わない

\*

\*

\*

黒沢様、横山様

早速のご返事、ありがとうございます。

興奮も、ありがとうございます。

恥ずかしいなんて、そんな。

ますます謎めいて味わい深くなってきました。

それから、おお、学者とは（大学教員とは）屈折ですか。

確かに、一般大衆はまっすぐに疑いを知らず、学者は偏狭でオタクとしてこだわる。

これが世界の構図でしょうか。

僕はなぜ傷のないまますくすく育つたんだろう？

引き裂かれていることに気づかないから？

今日は普通部の卒業式で、保護者の代表として

「若き血」の指揮をしてきました。



中学生のまっすぐささに共感しました。

いつまでも若き血に燃ゆる者でありたいと思っ  
ていますが、そういえば、昔、

会社の上司に、苦労も知らずにすくすく

育った風な所が嫌いだ、と言われたことが

ありました。そのときはさっぱり

意味がわからなかったものでした。

\*

\*

\*

前野隆司

## 前野さま

楽しんで拝読しました。

自分がいかにも気難しそうな「人文オヤジ」になってて、なんか漫才みたいなのやりとりになってますね。

気に入ってます。

それから、一点。本当は前野さんも引き裂かれているのだと思うけど。

武藤さん

\*

\*

\*

おっしゃる通り、文字にしてみると、武藤さんが実際以上にやや保守派の学者っぽく登場している感があつて、お気に召さないかと気になっていましたが、お気に召したようでよかったです。

『思考脳力の作り方（角川書店）』では、引き裂かれない方法は

視点の入れ子構造だというフレームワーク提案をしました。

だから、僕は引き裂かれていないつもりでいたんですけどね。

でも、武藤さんの視点から改めて読み直してみると、この文章は確かに引き裂かれていますね。

これはもう、引き裂かれていることを、自覚するかしませんか、敏感か鈍感か、受け入れるか否か。

引き裂かれは、他人には見えて、自分には見えないのか。

見える人と、見えない人がいるのか。

「禁じ手」と「引き裂かれ」によって僕には新しい世界が見えてきたので、なかなかよい漫才でした。

終わってみると、ダンスしてましたね。

前野隆司

(ダンス、していますか？／おわり)